

# 広島芸術学会活動報告

二〇一二年七月一日～二〇一三年六月三十日

▼平成二十四年七月二十一日(土)

ひろしま美術館地階講堂において平成二十四年度総会、第二十六回大会を開催した。

総会は大橋啓一事務局長の開会のことは、金田晋会長挨拶の後、松田弘委員を議長に選出し議事を進めた。第一号議案、平成二十三年度事業報告並びに決算報告について、大橋事務局長から資料にもとづく説明、続けて原田佳子監査から監査報告があり、審議の結果、承認した。第二号議案、平成二十四年度事業計画並びに予算案について、大橋事務局長から資料にもとづく説明があり、質疑応答、審議の結果、承認した。第三号議案、次期会長が指名する委員並びに監査について提案があり、それを承認した。第四号議案、会則の改正について、大橋事務局長から説明があり、事務局の変更についての改正を承認した。議事審議の終了後、青木孝夫次期会長挨拶、大橋事務局長挨拶があり、閉会した。

大会は四件の研究発表とシンポジウムを行った。研究発表は①崔眞英(広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期)「クルール・ジャンと韓流」②清水修全(東亜大学芸術学部准教授)「アルフレッド・リヒトヴァルク ―文化政策としての芸術教育」③大迫知佳子(お茶の水女子大学大学院研究員)「19世紀初期のパリ音楽院における対位法 ―諸対位法の理論対立をめぐって―」④青木孝夫(広島大学大学院総合科学研究科教授)「夜雨の美学」。

シンポジウムは「芸術と地域」をテーマとし、金田晋(東亜大学

大学院総合芸術研究科特任教授、前会長)の基調報告「地・人・芸術 ―「芸術と地域」を問う」の後、四件の事例報告が行われた。

報告は、①桑島秀樹(広島大学大学院総合科学研究科准教授)「十八世紀アイルランド人画家ジェイムズ・バリー ―カトリック刑罰法と「ケルト的崇高」」②キム・スヨン(インディペンデントキュレーター)「光州ビエンナーレを通して見た代案空間の可能性としての地域」③松田弘(広島県立美術館学計課長)「地域と展覧会の関係について ―『広島から広島』ドームが見つめ続けた街展の場合」④松浦康隆(写真家、広島の写真活用・保存の会事務局長)「木村伊兵衛氏・菊池俊吉氏たちが撮影記録した『LIVING HIROSHIMA』(1979年 広島県観光協会発行)を読む」

また、同日付で「藝術研究2012」(年報第二十五号)を発行した。

▼平成二十四年十月六日(土)

会報第一一九号を発行。巻頭言は会長青木孝夫の「藝術・学会の曲がり角」。第二十六回大会の研究発表の報告は、①崔眞英の発表を廖偉汝、②清水修全の発表を大山智徳、③大迫知佳子の発表を上野仁、④青木孝夫の発表を関村誠が執筆した。また、大成大輔「東広島市現代美術プログラム2012 宇山DNAを終えて」、袁葉「私的五輪観戦」の二編の寄稿を掲載した。なお、この号から判型をA4版に変更した。

▼平成二十四年十一月三日(日)

NSA:noborinachi space of artにおいて第一〇〇回例会を開催した。内容はフランスの美術評論家、キュレーターであるパスカル・ボース(Pascal Bausse)の「環境の哲学的実践者としてのアーティスト」と題した講演で、河本真理(広島大学)が通訳を行った。なお、この例会においては非学会員の参加者から参加費(一人一〇〇〇円)を徴収した。

▼平成二十四年十一月二十八日(水)

会報第一二〇号を発行。巻頭言は谷藤史彦(ふくやま美術館学芸課長)の「百島の現代アート」。第一〇〇回例会の報告を①伊藤由紀子、②樋口聡が執筆した。その他、前事務局長大橋啓一「広島芸術学会25年をふりかえって」、前事務局員米門公子「出会いに感謝!」、古谷可由(ひろしま美術館)の美術館レポート「海外美術館事情」アムステルダム編、馬場有里子(エリザベト音楽大学)のイベントレポート「CAMERA OBSCURA 6 BEYOND 音と映像の遊戯室」の寄稿を掲載した。

▼平成二十四年十二月二十二日(土)

広島市男女共同参画推進センター(ゆいぽーと)五階研修室において、第一〇一回例会を開催した。研究発表は①中曾政行(広島大学大学院教育学研究科修了)「歌川広重の特徴ある風景表現について―複数の透視図法が共存する重層的透視図法―」、②城市真理子(広島市立大学国際学部准教授)「室町時代の山水図屏風にみる文人イメージ」。例会後、懇親会を開いた。

▼平成二十五年一月三十日(水)

会報第一二二号を発行。巻頭言は大井健地(広島市立大学名誉教授)「月の光のほろび」。第一〇一回例会の研究発表の報告は①中曾

政行の発表を谷藤史彦、②城市真理子の発表を青木孝夫が執筆した。また、県民文化奨励賞を受賞された加藤宇章の「県民文化奨励賞を受賞して」、松波静香(ギャラリーG)の展覧会レポート(必見! 広島島の奇才親子)「船田玉樹展」「船田奇岑展」を見て、袁葉(広島大学)のエッセイ「秋の虫が鳴く頃…」を掲載した。

▼平成二十五年二月二十三日(土)

呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)四階会議室・研修室において、第一〇二回例会を開催した。研究発表は①向井能成(呉市役所産業部海事歴史科学館学芸課市史編さん係)「戦前呉市における洋画団体の変遷と創作動向―呉独立美術研究会とその周辺―」、②古谷可由(公益財団法人ひろしま美術館学芸員)「南薫造・永瀬義郎、疎開が残した地方への影響―「芸南文化同人会」の活動とその後―」。

▼平成二十五年四月十日(水)

会報第一二二号を発行。巻頭言は西原大輔(広島大学大学院教授)「著作権法が詩の研究を妨げる」。第一〇二回例会の研究発表の報告は①向井能成の発表を吉川昌宏、②古谷可由の発表を高村佳子が執筆した。また、大井健地(広島市立大学名誉教授)の展覧会評「玉樹画仙の訓戒」を掲載した。

▼平成二十五年五月四日(土)

広島県立美術館地階講堂において、第一〇三回例会を開催した。この例会は同美術館で開催中の「夏目漱石の美術世界」展の関連企画「漱石の文学と美術を語り、味わおう」として催された。越智裕二郎(広島県立美術館館長の挨拶を得た後、次の三つの講演ならびに質疑応答がなされた。①河本真理(広島大学)「夏目漱石と西洋絵画の女性表象―髪/鏡/水」、②青木孝夫(広島大学)「朧なる美を

めぐり」③西原大輔（広島大学）〈高田敏子の詩「布良海岸」と青木繁《海の幸》〉。

▼平成二十五年六月八日（土）

藝術学関連学会連合第8回公開シンポジウム「芸術と記憶」（於…国立国際美術館）に関村誠委員がパネリストとして参加し、1st SESSION「記憶と表象」において「ヒロシマの〈顔〉と記憶」と題した報告を行った。

▼平成二十五年六月十五日（土）

会報第一二三号を発行。平成二十六年年度総会・第二十七回大会のスケジュール、研究発表要旨、シンポジウムプログラムなどを掲載した。また、第一〇三回例会の報告を樋口聡、石井祐子、藤崎綾（広島県立美術館学芸員）が執筆した。

※文中、敬称を略させていただきました。

◆会員状況

平成二十五年六月三十日現在、法人会員二法人、個人会員一七三名（一般会員一四八名、学生会員二五名）

事務局